

「時代に合わせたコーチング」

2019年3月7日

広島地区ミニバスケットボール連盟

副会長 大庭 浩 資

広島地区ミニバスケットボール連盟の指導者の皆様、役員の皆様、先日の年度末総会では大変お世話になりました。

会長や理事長から話がありましたように、来年度はミニバスケットボール界にとって、大きな変革の年となります。これまで以上に情報共有を行い、ミニバスケットボールを愛する子供たちのために頑張ってまいりましょう。

さて以下の記事は、3月2日付の中国新聞「高校野球の現在地」に載っていたものです。

内容は高校野球の監督や指導者を対象に書かれていますが、同じスポーツを指導する我々にとって、とても参考になるものと思い紹介いたします。

指導者 「スパルタ封印 対話重視」

1月中旬、広島県監督会が開いた研修会。講師のメンタルトレーナー高畑好秀さん（50）＝広島市南区出身＝は野球部を職場に例え、出席者に語りかけた。「お互いにけなし合う組織でいい仕事はできないですよ。今の子供はそういう雰囲気だけで野球が嫌になってしまう。」

テーマは「時代に合わせたコーチング」。体罰やパワハラへの視線が厳しさを増す現状を踏まえ「自分が上司に何を言われたら嫌で、どうすれば前向きになれるか。一呼吸置いて考え、子供に伝えてほしい。」明るい雰囲気づくりに努め、日々の成長に目を配る大切さを説いた。

高校野球では長く「常識」とされたスパルタや根性論が見直されている。「今の選手は褒めて伸ばさないといけない」と広島・新庄の迫田守昭監督（73）。2007年の就任後、春夏計3度甲子園に導いたベテラン指揮官も時代の変化を実感している。

母校広島商の監督時代は「怒らない日はなかった。」しかし新庄では就任時からスパルタ指導を封印。伝統校と選手の気質の違いに加え「今の子供は親に大事にされている。怒ると萎縮する」との思いからだ。部員の上下も関係なく「どうすれば選手が伸び伸びできるか常に考えている。」退部者がほとんどいないことも方針が支持されている証しと受け止める。

広島県北部での指導歴が長い庄原格致の瀬尾充秀監督（51）は、前任の日影館での経験が印象に残る。09年の就任時は部員7人、10年秋には4人まで減った。部員数が多い三次の部長時代には「俺に付いてこいというやり方」だったが、指導方針を転換。練習メニューを一緒に考え、選手が好きな打撃練習を増やすなど自主性を重んじた。次第に部員が集まり、14年には24人まで増えた。

選手との対話も重視した。野球ノートをやりとりして一人一人の意見や悩みに耳を傾け、本音をぶつけ合った。「本気度を伝えることができた。学校の特色を理解し、選手層に合わせた指導をしないといけない」との思いを強くした。

それでも、行き過ぎた指導による部長や監督の交代は毎年のように起こる。17年度に発足した県監督会では、年1回研修会を開き、効果的な指導法や課題などを情報共有。今後は他県の事例を参考に、体罰根絶宣言の採択も検討を進める。「環境に合わせて、指導者も変わっていかないといけない」と、理事を務める高陽東の沖元茂雄監督（53）。現場での共通認識を広げるために知恵を絞る。

このような記事を読むたびに、36年前、自分が初めてチームを持った頃、「教員」「監督」「コーチ」という御旗を振りかざして、「指導」「チームを勝たせるため」「上手にさせるため」という大義名分で、児童を大きな声で怒ったり、体罰を行ったりしたことが思い出されます。今考えると、当時の子供たちに本当に申し訳なく、また恥ずかしい限りです。

その時の何人かとは、ミニバスケットボールの会場で出会います。私自身は懐かしくもあり、一方で何とも言えない気持ちになるのも正直なところ。しかし、彼ら・彼女らは、当時のことを笑い話で流してくれます。また、「あの時があったからこそ今がある」と言ってくれる者もいます。その事実を「嬉しい」のか「悲しい」のか、今だに判断に悩むところです。ただ言えることは、当時の事態が完全に水に流された訳ではないのは確かであるということです。

過去を変えることはできませんが、未来は変えることができます。私自身への戒めとともに今後も、「子供への指導において、暴力や暴言は絶対に許されない」ということを発信し続けます。

記事にもあったように、これからは「時代に合ったコーチング」が大切です。我々指導者が集まった時に、「どうしたらチームが強くなるか」について話をすることが多いのは当然の事。しかしこれからは、「どうすればバスケットボールが好きになるか」「どうすれば子供たちに伸び伸びとプレイさせることができるか」についても、お互いに意見交換できればと思います。

またいろいろなご意見をお寄せください。よろしくお願ひ致します。